

日本

# ハンザキ研究所ニュース 2012(5) : 通巻 No. 77



発行2012年5月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

## オオサンショウウオ幼生の死体

ハンザキの死体を野外で見つけるのは珍しい。しかも全長 17 ㍉という鰓孔がピンホール状の変態直前のサンプルである。5月21日に当法人の奥藤事務局長が市川支流の大物谷で発見したといって持参してくれた。左後肢の前方から内臓が飛び出している。右前肢の肩甲骨付近には鋭い牙? でやられたような孔が開いていた。尾も千切れそうな傷があった。小さな動物に咬みつかれたが防御のための白い粘っこい強いにおいの液を出して食われることから逃れたといったところではないだろうか? ひと呑みにされていれば貴重な標本は残らなかっただろう。成体であってもなかなか死体を見つけることはできないので、死亡は残念だが標本として残ることになった。



ハンザキ幼生の死体

1975年の調査開始以来、十数個体の死体を拾ってきた。その多くは繁殖期におけるオス同士の繁殖巣穴をめぐるバトルによる首切れ死体である。大きさにあまり差がない場合は軽傷で済むが、頭部を呑みこまれると体を回転させて頸部に致命傷を負ってしまう。

ハンザキの生態調査を継続中の研究者でも、初めて“首切り死体”を発見した時には興奮したと言っていた。何しろ川では水が流れているので、死体も流されてしまうことが多いだろう。本当にタイミングが良くなければ遭遇することはできない。そのためにはフィールドをこまめに歩き回るしかないだろう。しかし、当ニュースNo.65にも記載したが、地域の皆さんの協力ありがたいことである。身近な隣人であるハンザキは地域の方々にとっては珍しくもない生き物だろう。しかし、私が40年近く追いかけていることで、皆さんの見る目も変わってきたのではないかと思う。今後ともよろしくお願ひしたいものだ。



写真1 沖縄からのハンザキ・ツアー



写真2 新しいタオルと手ぬぐい



写真3 日中に出現のアナグマ



写真4 アナグマがおとしたミミズ

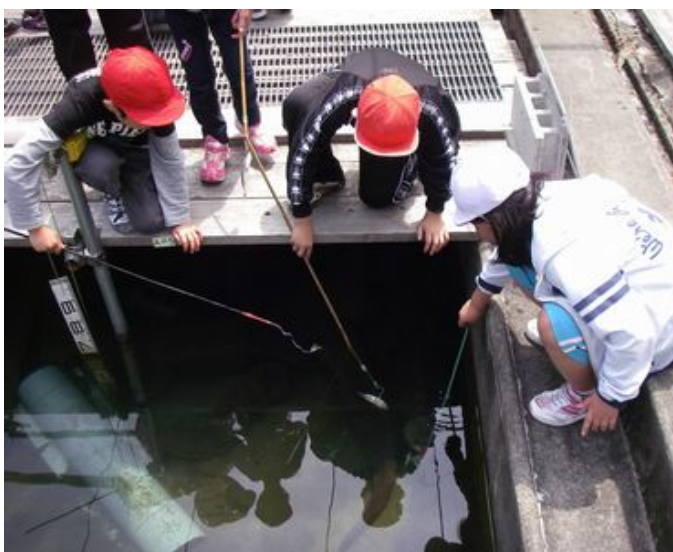


写真5 生野小学生の餌やり体験



写真6 トレッキングで発見命名した“簾池”





写真7 イノシシに食われたタケノコ



写真8 クモの話の本庄さん



写真9 左後肢の指全失 (加賀見氏提供)



写真10 イシガメのプロポーズ?



写真11 日本工科専門学校生の実習

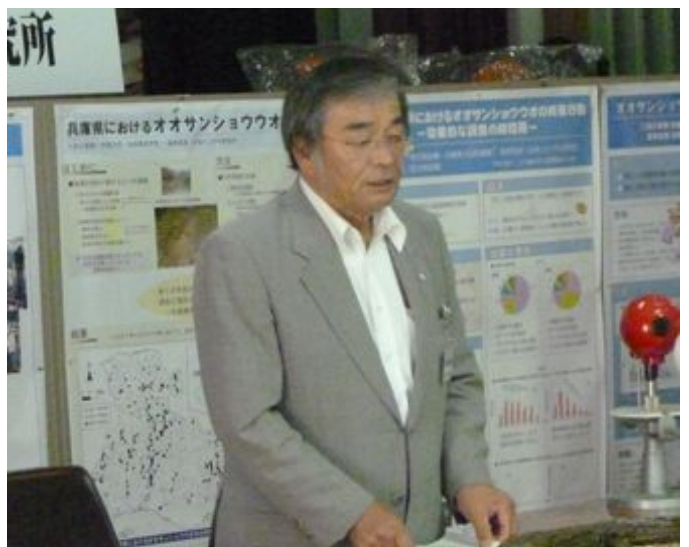


写真12 総会で多次朝来市長の祝辞

## 円山川水系におけるオオサンショウウオ事情⑧

会員 加賀見 省一 (但馬国府・国分寺館)

本年度のオオサンショウウオ保護 2 件を報告します。

今年度最初の保護は、6月 22 日です。同日の朝、出石総合支所から電話があり、「出石川支流の袴狭川でオオサンショウウオが見つかったという電話がありました」と連絡を受けました。電話で詳細を聞いてもわからないということでしたので、念のために文化財保護担当課の文化振興課の職員（私もそうですが）に連絡をして、同行してもらうことにしました。電話で通報していただいた方に場所を聞き、現場に到着。川は台風 4 号の影響で増水していましたが、高さ約 1 m の堰があり、オオサンショウウオは上流に移動できずに堰の下で少し深くなったところに潜んでいました。見ておられた方の話によると、下流から上ってきたそうです。しかし、下流も水量が少なく、平水になると下流にも移動できなくなることが予測されたため、靴を脱いで川に入り、網ですくうことにしました（写真は翌日に撮影、既にかかなり減水していました）。マイクロチップは未挿入の個体で、計測、写真を撮影した後にチップを挿入し、安全な場所に放流をしました。保護したオオサンショウウオは、全長 77.2 ㎝、体重 4,300 ㌊で、チップ番号は 0006CC695F です。体には目立った傷はありませんが、左後肢の指はすべて失われていました（写真 9）。

2 件目は 7 月 4 日です。当日は休館日で仕事が休みです。夕方、携帯電話を見ると当館の学芸員から着信がありました。電話をかけなおすと、「今、出石総合支所から出石町寺坂でオオサンショウウオが見つかったという連絡が入ったので、これから現場に向かいます」とのことでした。私は出かけることができなかつたため、今回は彼に任せることにしました。

翌朝、確認をしたところ、場所は出石川支流の粟谷川でした。この川では、以前にも動けなくなってカラスに背中をつつかれ、卵を放出した個体が発見されました。今回の場所は、そのすぐ近くでした（「日本ハンザキ研究所ニュース 58 号」に掲載）。前回同様、三面コンクリート張りの水路には 1 ㎝程度しか水がなく、かなり弱っていたようです。彼が現場に到着した時には、地元の人によって大きな容器に入れていただけていました。

オオサンショウウオは、全長 93 ㎝、体重 6,000 ㌊の個体で、マイクロチップが挿入されていました。チップの番号は 00066AC1D2、教育委員会のデータベース（Microsoft 社の Acces で作成）で検索したところ、出石川復興事業に伴って、2005 年 6 月 2 日に寺坂の出石川で保護、同所で放流された個体であることがわかりました。そのときの個体の全長や体重等のデータを持っていないため、大きさの比較はできませんが、一瞬にして過去のデータが検索できるマイクロチップの大切さを改めて認識することができました。

ところで、オオサンショウウオの保護は、各市町の文化財担当職員が行うことになっていますが、市民の方々から寄せられた情報を元に保護したオオサンショウウオの情報は、「史跡名勝天然記念物の現状変更等の許可状況」として、3 ヶ月毎に兵庫県教育委員会を経由して文化庁に報告することになっています。



## 黒川でのカワガラスの標識記録

会員 脇坂英弥 (日本鳥類標識協会)

カワガラスはスズメ目カワガラス科の鳥で、北海道から屋久島までの各地に生息する。河川上流部の溪流沿いになわばりを占有し、一夫一妻で繁殖する。繁殖期は2月から5月だが、北海道では4月から、九州では11月から始まるなど地域によって違いがある。餌は主に水生昆虫(トビケラ・カワゲラ・カゲロウ類など)で、浅瀬を歩きながらついばんだり、水中に潜ったりして採食する。

筆者は黒川の鳥類相を把握する目的で、2010年より年間数回の鳥類標識調査をおこなっている。その際、2012年6月3日にカワガラス3羽を標識放鳥したので報告する。

調査では研究所の横を流れる黒川に、調査用カスミ網を2か所に設置した。調査時間は8時から13時までで、その間に1時間ごとに網場を巡回して鳥がかかっているか確認した。

カワガラス3羽は9時から12時にかけて捕獲された。内訳は成鳥1羽、幼鳥2羽でいずれも性別不明であった(図1)。この3羽にそれぞれ右脚に環境省の金属足環をつけ、全長・体重を計測し、速やかに放鳥した(表1)。

表1 カワガラスの標識記録

調査日	足環の番号	性別	年齢	全長 g	体重 mm
2012/06/03	5C-07001	不明	幼鳥	78.5	224
2012/06/03	5C-07002	不明	成鳥	88.6	229
2012/06/03	5C-07003	不明	幼鳥	86.0	220

今回の調査でカワガラスの幼鳥が捕獲されたことから、黒川で本種が繁殖していることは明らかである。本種の巣は水辺近くの岩の割れ目や窪み、滝の裏側の岩の窪みのほか、橋げたの下や水門の隙間といった人工物にもつくられる。巣の形状はドーム型で、外装にはコケ類、内装には枯れ草を使用する。メスは4~5卵を生み、卵は約3週間でふ化する。

今後、カワガラスの営巣場所の特定のほか、標識個体が継続的に観察されるか、どれくらいのなわばりを占有するのかを研究することが望まれる。次回の調査は本種の求愛行動がみられる10月に予定している。溪流性鳥類のカワガラスの生態解明に少しでも貢献できれば幸いである。

文末ながら、調査の機会を与えてくださった研究所の皆様に心より感謝申し上げます。



図1 標識放鳥したカワガラス(左:成鳥、右:幼鳥)

## テンと話した

理事 黒田 哲郎

「あ！」と叫んで急ブレーキを踏んだその瞬間、全てを悟った。  
(マフラーが落ちている・・・みたいやけど、そんなはずないわな。またか・・・)

キツネやイタチとは違う、鮮やかな色をしたその物体は、きっとテンに違いない。そして今は夏、道端にマフラーを落として行く人はいないだろう。間違いなく跳ね飛ばされたテンだ。モリアオガエルやヘビ、アナグマに鹿など、田舎で暮らしているといろんな動物が轢かれていく場面に出くわすことが少なくない。



その日は、幸か不幸か私の車にはダンボールが積んであった。車に乗せるのはちょっと嫌だけど、テンの死骸は研究所にないから持って帰ったら栃本先生、喜ぶかもしれないな、と思ってその死骸に近づいた。万が一生きていて噛まれたら嫌なので、テンの前まで来た時に一声かけた。

「おーい。大丈夫か？」

しばらくして、

「…………ん？ ああ……」

と、気だるい感じでテンが頭を起こした。



轢かれたことには違いないと思う。

脳震とうか打撲か、何かのダメージを負っているのは間違いないが生きていた。よかった！

テンは田舎で見かける動物の中では、カワセミには到底及ばないものの、それでも比較的鮮やかだ。時々見かけるタヌキやキツネ、イタチ、アナグマなどもかわいいと思うが、体の色が地味だ。それに比べてテンの体毛はややオレンジがかっていて実に綺麗だ。特に首の後の部分は鮮やかな柿色で、その毛皮が高価で珍重されたというのも分かる気がする。また、足は半分から下が黒い毛に覆われているため、ブーツを履いている、と形容され、一目でそれと識別できるくらい分かりやすい。そして黒い毛で覆われた顔も可愛らしい。



一年に一度か二度しか見ないテンをこんな形で見ることになったのはとてもショックだったが、仮にも生きています。このまま放つてはおけないので、せめて草むらに運んでやろうと思い、ダンボールに乗せようとする時、

「・・・いいよ」

と、弱々しく立ち上がり、よたよたと自分から草むらへ歩いて行った。私もその後をついて行ったのだが、テンは草むらにたどり着いたところで、再びどさっと倒れた。

もう一度、「大丈夫か」と問いかけたところ、何も言わずにちらっとこちらを見た。薄い西日が横から当たったその瞳は、深海のように濃い群青色だった。あまりの綺麗さに、我を忘れて吸い込まれるような気持ちだった。



「もう、ほっといて」

そんな感じでテンは再び立ち上がり、その奥の林へと消えていった。

我に返って、テンの無事を願いながら車へ戻ったが、妻は「可哀そうやけど、あの子はたぶんダメやわ。もう回りにハエがたかってたから」と言う。

自然は残酷だ。死期が来ると、それを嗅ぎつけて順番に分解者が現れる仕組みになっている。あのテンだけは無事に息を吹き返して欲しいと願いながら、その場を後にした。



もちろんテンが喋るわけではないが、あの時、確かに私とテンは目で会話した。好きな動物と意思の疎通が叶うのは幸せである。それがこんな場面であったことは悲しいが。

ただ、だから車に乗るのをやめよう、と言うことにはならない。車に乗らなくても歩いているだけで気付かないうちにカエルの子どもをいくつも踏みつぶしているし、ハエや蚊、ムカデやマムシなど、自分にとって害があるという理由でためらわずに殺している。どれもこれも同じ一つの命であることには変わりがないはずなのに。

だが、これも言っても仕方がない。出来るのはせいぜい注意深く運転することだけだ。そんな訳で今日も私はテンに出会わないかとキョロキョロしながら車を走らせている。

## ハンザキ研日誌

2012年5月

- 2日 兵庫県立大学・三宅研究室より院生4名、学部生3名三宅先生と野外実習に
- 3日 広島や神戸などから見学3組
- 4日 今年度の新しいタオルと手ぬぐい納品あり
- 10日 京大・森 哲先生他来所、カモガワ・ハンザキの冷凍標本搬出
- 11日 キノコの調査、今年度から観察会とは別に実施(横山先生他)
- 12日 今年度の初イベント “空からハンザキ研を見よう “新ルートでのトレッキング(兵庫県立大学ワンダーフォーゲル部 OB 会岡村さん他6名
- 13日 沖縄から “とことんハンザキ・ツアー” 元・文化庁記念物課の花井正光さん他6名オオサンショウウオ初見参に来所
- 15日 朝来市立生野小学校から自然学校の下見に
- 16日 NPO 法人の会計監査、大谷・堀内両監事により実施
- 20日 事務局会議、10名参加
- 21日 金環日食
- 22日 ・ラジオ関西 “谷 五郎のところにきくラジオ” 番組で NPO の紹介  
・キノコ調査、横山先生他4名
- 23日 ハンザキ保護センターの2号ポンプ取り付け
- 25日 兵庫県立大・三宅研究室フィールドワークで2年生7人見学に
- 26日 ・第4回 NPO 法人の通常総会、出席 35名  
・記念講演会 “クモの話” 竹野スノーケリング・ビジターセンター本庄史郎所長  
・日本工科専門学校・田中先生と生徒7名実習に来所  
・高砂の漁師・山口さん(水族館時代に大変お世話になった)など9名見学に
- 28日 関西電力が古いトランス取り換え、ポンプのアンペアが2ポイント下がった
- 29日 生野学園から見学に、引率1、生徒3
- 31日 朝来市立生野小学校5年生 20名と引率4名、自然学校の授業で見学に

.....

## ハンザキ所長のツブヤ記録

あっという間の春であり初夏ということになるのか良い季節となった。そして、例年通りの NPO 法人としての総会も無事に終了した。記念の公開講演会もウミガメ、ナマズに続いて “クモ命” の本庄さんをお願いした。クモ学会は絶滅危惧種なのだそうであるが、なかなか面白かった。ご本人は勤務先の関係で海の生き物の話はたびたびあるが、クモそのものの講演は初めてでうれしくて仕方ないとコメントされていたのが印象に残った。クモは嫌われることが多く “クモ” の一言で片づけられることが多いが、私も本庄さん同様に室内のクモの巣はそのままにしている。ハエヤカ、コバエを食ってくれるのだから。